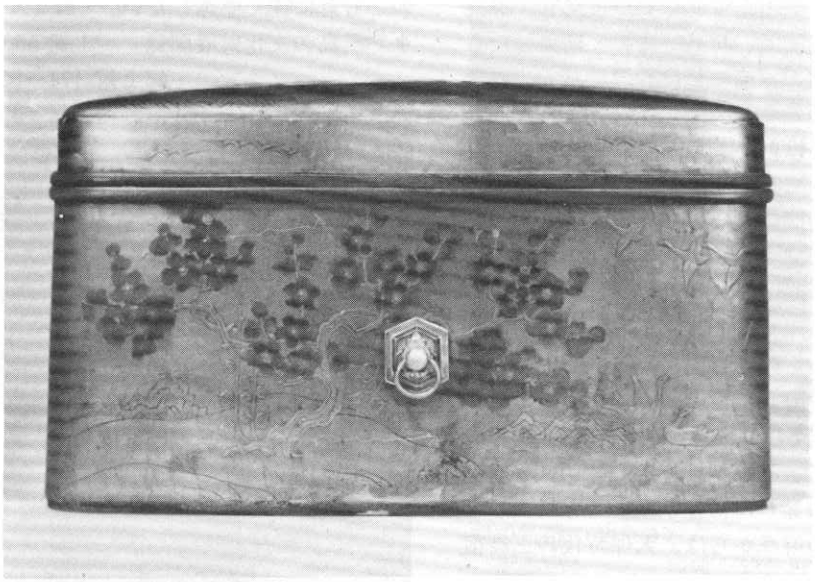
三　島　市　　（通巻第20号）

郷土館だより

Vol. Ⅶ No. 2
1985. 1. 1



梅蒔絵手箱
（国宝　三嶋大社所蔵）

目　次

「三島の文化財展」を終って……1
行事報告……2
本陣文書……3・4
雨乞いの龍……5・6
その他……7

「三島の文化財展」を終わって

三島市内に現存する、指定文化財を紹介する目的で開かれた「三島の文化財展」が終了した。

10月9日から11月11日まで、当初の予定を一週間延長し、延べ33日の開催期間中に、約7800人の来館者があり、盛況であった。

指定文化財52件のうち、取り扱いの難しい刀剣や、移動不可能なものは、展示から除外したので実際に展示したもの11件、模造品・参考品・写真で紹介したもの24件である。尚「三島の文化財展図録」には、全ての指定文化財を紹介した。

今回の新しい試みとして、ビデオの導入があげられる。これは、展示不可能な史蹟・建物・芸能などを紹介する目的で、職員が撮影・編集したものを、展示会場前で、放映したものである。残念ながら、技術の未熟さと、撮影機材の不良のため満足のいく画面とはいい兼ねたが、改良を加えれば、見学者にとって有効な展示解説になるものと思われる。上映時間は10分～15分が限度で、それ以上たつと、席を立つ人が増えるようである。

今回の展示の主眼となったものは「三島宿風俗絵屏風」（六曲一双）である。江戸末期の画家、小沼満英筆によるもので、天保年間(1830-44）に三島の大中島（本町）で醤油屋を営なむ山口家に一年余滞在し、描き上げたものである。

金箔地に採色で、三嶋神社を中心に西は千貫樋から東は、箱根の登り口初音ヶ原までを鳥瞰して描いてある。この屏風からは、天保時代の三島宿の賑わいが伝わってくる。

三嶋神社は、安政の大地震の倒壊前の社殿のありさまを伺い知ることが出来る。流れ造りの拝殿を始め社殿の欄干（らんかん）は朱塗りで、華やかであった。惣門に仁王像が安置され、三重の塔が建てられるなど、当時の神仏混交ぶりを現わしている。

宿場の中心問屋場（現在の郵便局の地）では、馬の継立の最中、街道には、富山の薬売りやら、かぐらの一行、侍とお供、馬と馬子達、天秤棒に荷をかつぐ者、籠（かご）かき、と、人通りが断える暇もない。街道筋の店をのぞけば、旅籠（はたご）が軒連ねる。幕末には、150軒の旅籠が立ち並んだ大宿である。この他、まんじゅう屋、干物やわらじを売る店、そして街道名物の茶店と、賑やかな町並みである。

郊外の小浜池では、船遊びを楽しむ者、そして滔々（とうとう）と流れる広瀬・源兵衛川、浅間さんより湧き出て、水車を廻し流れる御殿川、桜川に落ちる白滝と洗濯女、それぞれの河川が今とは比べものにならない豊かな水量を誇っていたようである。

川原ヶ谷では、雁の飛ぶ中、稲刈りの最中、脱穀にいそしむ者、牛で田を耕す者、馬で稲を運ぶ者と、秋の農村風景がくり広げられる。

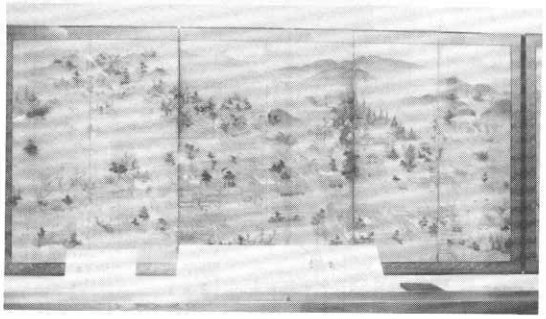
画中130人余のほとんどが庶民で、彼らの生き生きとした生活が、伝わってくるようである。

この屏風は、現在も山口家に保存されている。拝見する機会が少ないものなので、今回快くお貸し下さり、市民にとって幸いであった。

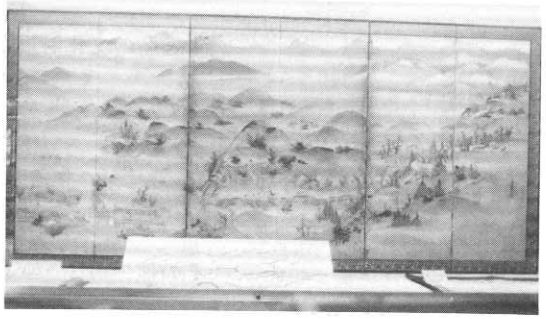
この他、三嶋大社のお田打の祭具、玉沢妙法華寺所蔵「日蓮上人像」(複製）や、楽寿館の襖絵、三四呂人形、古文書類が展示された。関係の方々のご好意に深く感謝したい。　（福田）

＊「三島の文化財展図録」　1冊500円　発売中
郷土館（71－8228）まで

三嶋神社境内



三島宿風俗絵屏風　左



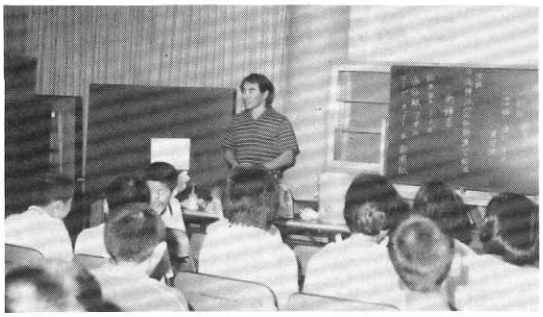
三島宿風俗絵屏風　右

行事報告

少年教室

時　　9月23日(日)　9：30～13：00
会場　　郷土館一階会議室
受講者　29名（中学生）
講師　　郷土館職員　稲木　久男
テーマ　拓本教室

はじめに拓本の目的と種類について勉強した。続いて楽寿園万葉の森などにある石碑から実際に拓本をとってみた。はじめて体験する者ばかりであったので最初は上手にできなかったが、終りの頃は皆手つきも良くなり、りっぱな作品が出来あがった。　（稲木）



少年教室講座風景

歴史研究会

(1)大社の話
　時　　9月8日(土)　13：30～16：00
　講師　　三嶋大社禰宜　槇　茂彦氏
　受講生　44人
(2)妙法華寺の話
　時　　10月14日(日)　10：00～12：00
　講師　　妙法華寺貫主　松井　大周氏
　受講生　37人
(3)史跡めぐり
　時　　11月10日(土)　9：00～13：00
　講師　　妙法華寺　小池　政臣氏
　　三嶋大社　鈴木　真夫氏
　受講生　38人

歴史研究会史跡めぐり記念写真

妙法華寺の話をされる松井貫主

テーマ展

「三島の文化財展」関連講座

時　　10月21日(日)　13：30～16：00
会場　　郷土館一階会議室及び展示場
受講者　26名
講師　　三島市文化財保護審議委員長
　　工学博士　　宮脇　泰一氏
テーマ　「建築物の遷り変わり」

前半は、日本建築の流れを、古墳時代～現代までの建築物・庭園・彫刻の様式の変遷や特徴を話された。次にテーマ展会場にて、指定建築物である三嶋大社・玉沢妙法華寺・楽寿館及び「三島宿風俗絵屏風」の展示を前に、それぞれの建物・彫刻の特徴の話をされた。

実際のところ、複雑な建築様式をわずか1時間の話にまとめるのに、相当苦労されたようであるが、テキストを用意され、わかり易い話であった。ともすると、建築物の分野は皆、敬遠するのであるが、宮脇先生の話を伺った受講者は、建築物の重要性に興味を持ったようである。

展示場で解説する宮脇先生

三島本陣文書整理

寛政３年の大風雨

寛政３年９月３日の夜から４日にかけて、三島宿を襲った大風雨があった。この日は、太陽暦になおしてみると、1793年９月30日の夜から10月１日の朝にかけてということで、台風としては遅い方である。この嵐は、雨よりもむしろ風が強い、いわゆる風台風であったようだ。

本陣文書から

樋口本陣文書の寛政年中文書は、ほとんどこの大風雨関係の文書で占められている。「乍恐以書付奉願上候」で始まる救済嘆願文書である。それだけこの大風雨が大きく、多くの被害をもたらしたものであったことが伝わってくる。

この年、この台風以前にも、いくつかの台風が三島周辺を襲っているようだ。台風ラッシュの年であった。度重なる被害は、宿場をはじめ本陣にも少なからずのダメージを与えた。ところが、そこはさすがに「御用」を務める本陣である。救済を求めるあてがあるから良い。

本陣・脇本陣連名で出した韮山役所への嘆願書を読んでみよう。　（右ページ参照）

文書に依れば、戌年八月の大風雨の時の助成による修理箇所も、この年の度重なる大風雨によって何回も破損し、その度に何とか修理をしてきたのだが、今回の大破損では決定的に困ったと嘆願している。余程のダメージであったのだろう。本陣のように一般のはたごや民家とは異なって、おそらく頑強に建築してあっただろう建物でも以上のような被害であることから、宿場全体に与えた被害の大きさも想像できる。

この年樋口伝左衛門は、本陣・脇本陣連名の嘆願書の外に、何通かの嘆願及び注進書を出している。本陣文書中からその中の５通の文書を拾い出して、列記し、その概要を記してみよう。

(1)　源尾平右衛門御家
　　御役人衆中様　　寛政三亥九月
九月三日・四日の大風雨によって大きな被害を受けたので、格別の御茲悲をもって、御救御助力を下さるよう願う。

(2)　高松様御家
　　御役人衆中様　　寛政三年亥九月
九月三日・四日の大風雨による被害を報告すると共に、九月二十九日の御止宿に感謝して、何とか勤めることができるよう精を出すとの注進状。

(3)　榊原甲斐守様御家
　　御役人衆中様　　寛政三年亥九月
九月三日・四日の大風雨による被害を受けたので、御助力をお願いしたい。

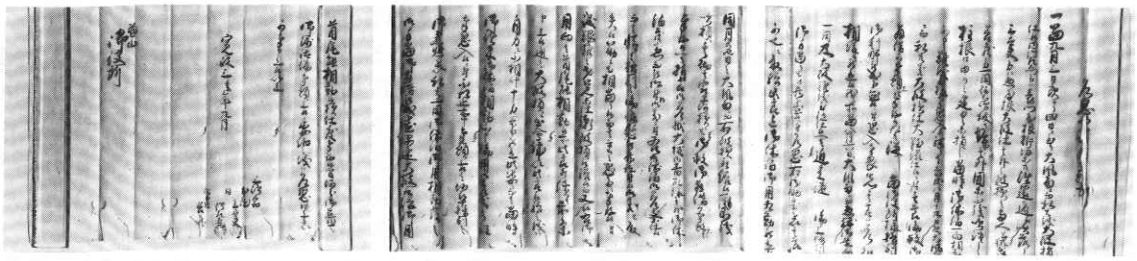
(4)　松平周防守様
　　御役人御衆中様　　寛政三年亥九月
去る六月六日夜の大風雨により被害を受けたことや過去数度の類焼によって、本陣の日々の暮しにも困る状態となっているので、御助力によって本陣が相続できるようお願いしたい。

(5)　保科越前守様御家
　　御役人衆中様　　寛政三年亥八日　月
(4)の文書と同文（しかし、大風雨の日については、八月六日となっている。おそらく(4)の方が間違いであろうと思う。

上記した５通の書状でみてきたように、本陳の特権は、江戸幕府や諸大名の「御用」を務めることを理由に、災害等による困窮に際しても頼りにするあてが有ることである。しかし、こうした嘆願書の文面にも、本陣職を何とか相続したいという気持ちが、ありありと読み取れる。韮山の役所に対しては、「御用」に差支えとなるので救済をと願い、諸大名に対しては「公儀の下知」が無いので力添えを、と旨く訴え分けているのである。このことは、本陣職が由緒ある名誉な職である割には、実際のところは実入りは少なかったということなのであろうか。

ともあれ、寛政三年九月の遅い台風には、さすがの本陣も困ったのであった。

（杉村）



乍恐以書付奉願上候

一、当九月三日夜ヨリ四日ニ至リ大風雨ニ而
私共儀大破損
仕候内傳左衛門方ハ表門屋根桁梁共往還通
江吹落し
三太夫方ハ惣屋根大破仕其外之破損者両人
并脇本陣
善蔵方一同壁吹抜キ塀其外囲等ふ残吹潰し
柱根口ユガミ建具等損し当時御休泊一向相
勤
ふ申難儀至極奉恐入候殊ニ者去戌八月十九
日夜大風雨
ニ而私共義大破損仕大難渋仕候ニ付其節御
救御
拝借可奉願上与奉存候得共従　当御役所様
格別之
御理解被成下置候ニ付恐入奉畏先其節ハ差
扣
相凌キ罷在候然ル所当八月六日大風雨ニ而
惣躰御殿向
一同及大破難儀至極仕候へ共近来従　御上
格別之
御手当テも被為下置候ニ付乍恐右御助成を
以其節も
可也ニ取繕此節迚御休泊御用相勤罷在候処
同月廿四日之大風雨ニ而右破損取繕候所へ
不残
吹損其砌者最早何様ニも御救御拝借可奉願
上与
奉存候へ共折節御差掛大坂御番衆様其外御
休
泊茂兼而被仰付候御義ニ付右御休泊御差支
等仕候
而者情々格別之御憐愍被為仰付候御義も取
失候筋ニも相当り候而者重々恐多ク奉存候
ニ付
誠艱難之才覚等仕漸破損取繕候而又候右御
用向者首尾能相勤候所此節打続キ前条
申上候通之大破損ニ出会誠ニ以此節取繕之
儀ハ
自力ニふ相叶十方ニ暮而罷此姿ニ而者而者
当時
御往来御休泊相勤ふ申御用御差支之程
奉恐入候ニ付ふ得止事奉願上候者何卒格別
之
御茲悲を以私共一同御休泊御用相勤候程之
御手当御拝借被成下置早速大破取繕御用
首尾能相勤候様仕度奉存候間何分御茲悲之
御沙汰偏奉願上候委細之儀ハ乍恐口上を以
可奉申上候以上

寛政三亥年九月　　三嶋宿本陣
三　太　夫㊞
同　傳左エ門㊞
脇本陣
善　　蔵

韮山御役所

雨　乞　い　の　龍

郷土館企画展「ワラと生活」

12月20日から来年３月10日までの予定で「ワラ」と生活」という企画展を開きます。人々の生活全般とワラとの関連を主題に、様々なワラの作り物を集めて、展示し、人間とワラとのふれ合いの歴史をふり返ってみようというわけです。このような企画にぴったりのワラの作りものが、箱根西坂の地域にあることを聞いていました。雨乞いに使われた龍の作りものです。そこで早速今回の企画展に出品して頂く交渉をすると同時に、郷土館としては材料のワラ・麦ワラ・竹等の手配を始めました。実に幸いにも、三ツ谷新田の老人会が龍作りの方を快よく引き受けてくれて、材料は三島市内のあちこちの農家が分けてくれることになりました。三ツ谷の老人会長さんと相談の結果、龍作りの日は10月５日と決定し、こちらは小型トラックの荷台いっぱいのワラを用意して出掛けた次第です。

三島市三ツ谷新田

箱根山西中腹の村落三ツ谷新田では、昔、ワラ（麦ワラを含む）で龍を作って、雨乞いを行なっていました。平地と異なって、傾斜地に位置する同地は、水利が大変悪く、一度日照りが続くと農作物は大被害を受けたものでした。このような時、農民たちにできることと言えば、天に向って雨乞いすることぐらいだったのでしょう。

雨　乞　い

雨乞いに関する全国的な民俗分布を見ると、各地で各様の方法で、雨乞いが行なわれていて興味深いものがあります。これらの雨乞い行事を分類してみると、およそ次の様な５型に分けることができます。

①山上で火を焚く方法で、もっとも広く分布するもの。
②唄や雨乞い踊で、村の神社や寺院を練り歩く型。
③水神の住む聖池を汚して、神を恐らせ、雨を降らせようとする型。
④神社に籠り降雨を祈願する型。
⑤聖池から水を貰ってくる方法は、水神や龍神の住む池から水を貰ってきて、村の神社や水源池にその水をふりまくもの。

三ツ谷新田の雨乞いは、龍を作って行なうことから、龍神信仰と関係があります。三ツ谷では、日照りが続くと、村中が総出でワラ・麦ワラ・縄などの材料を持ち寄り、龍を作り、これまた村中総出で大騒ぎで、村中を龍を担いで回ったということです。松雲寺（日蓮宗）のお尚さんも一役かって出て、読経の後、担がれ動き回る龍に乗ったりもしたと聞きました。景気付けに鐘はジャンジャン鳴らすし、龍に向って水は掛けたりの、それは大騒ぎの雨乞いだったそうです。龍作りに麦ワラを多く使用したのは、水を掛けられた際、稲ワラは水を含んで重くなって困ったが、麦ワラなら水をはじいてしまうからでした。村中を回り終った龍は、最後に大川（山田川）へ流して雨乞いは終りでした。

龍という観念上の動物は、中国から渡来した思想から生れました。日本の龍神信仰も、元は中国の思想にあったわけですが、この龍が雨乞いと結び付いた理由は、水神のシンボルである蛇信仰との結合に依るものであろうと考えられています。このようにして龍神は、水田耕作を主体とする日本の農民を守る神として、広く全国で信仰されるようになったのでした。

三ツ谷のように稲作の無い地域で龍神が信仰されるようになったのは、平地の稲作農民たちがやってきた信仰形態の中から単純に龍と雨乞いを取り出して結び付けた、台地農民の知恵であったと思います。

龍　作　り

材料（６メートルの長さの龍）
(1)麦ワラ（10束）
(2)ワラ（10束）
(3)ナワ（２巻）
(4)竹（１本・６メートルのもの）
(5)ベニヤ板
(6)銀紙
(7)板
(8)ヒバの葉

胴体の心棒になる竹に麦ワラをナワでしばり付けます。頭部には多く、胴体中央をふくらみをもたせるために少し多く、尾の部分は細くなるよう

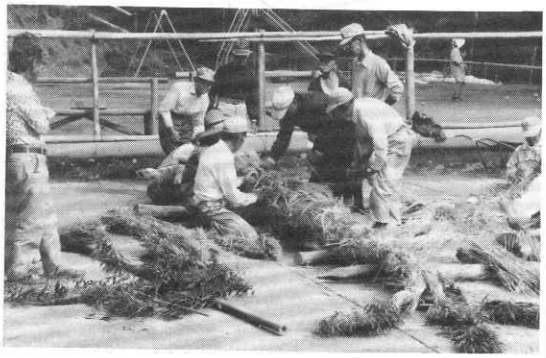
にします。最後尾は、三又に分かれているように、細い竹を３本広げて使います。麦ワラで大体の形ができたら、次はワラを同様にしばり付けて、ハサミで形を整えます。口は大きく開かせ、迫力のある形になるようにします。一方が胴本体を作っている時、他方では龍の舌を板で、目玉を丸い玉を使って、歯をベニヤ板で作って用意します。目は銀紙で包み、舌は赤い色で塗ります。できたワラの龍に、舌を差し込み、目をはめ込み、歯を取り付けると、ほぼでき上りです。最後はヒバの新しい葉を龍の体に差し込んでウロコとします。

龍を作り終って

かくして龍は完成しました。大勢の三ツ谷の老人方が約６時間かけての龍作りでした。この老人方の中にも、実際の雨乞い行事で龍作りを経験したことのある方は、すでに居ませんでした。ほとんどの方は「子供の頃見たことがあった」という経験の持ち主です。それだけに、この龍作りの苦労が、判って頂けるものと思います。三ツ谷の皆さん、本当にありがとうございました。（杉村）

1.心棒の竹に麦ワラをしばり付ける。

2.頭の麦ワラは多めに



3.全体の形ができる

4.ハサミで形を整える

5.目玉、歯を付ける

6.ウロコとしてヒバの葉を差すと完成

テーマ展会場改装工事について

郷土館では昭和58年、59年の２ケ年継続で１階テーマ展会場の展示ケース改装工事を行った。

既設の物は館職員の手によって開館当初ベニヤ板と紙貼りとで作られ、以来10年その役目を果してきたが、幸い改装の運びとなったのである。

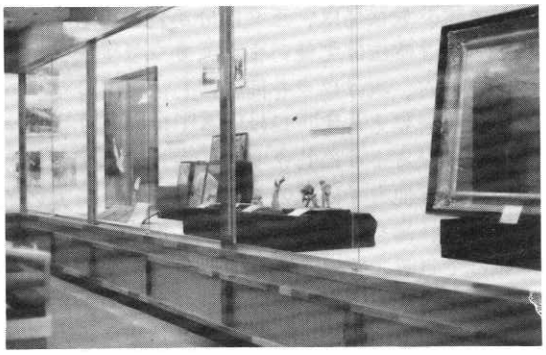
以下改装工事の概要を記しておく。

(1)昭和58年度分

①工費　　260万円
②工期　58年８月１日～９月30日
③業者　㈱長谷川木工所
④場所　郷土館１階テーマ展会場西・北側展示ケース

(2)昭和59年度分

①工費　　251万８千円
②工期　59年８月29日～９月29日
③業者　㈲田中家具
④場所　郷土館１階テーマ展会場東・南側展示ケース



新装になったテーマ展会場展示ケース

表紙写真解説

梅蒔絵手箱（国宝　三嶋大社所蔵　東京国立博物館寄託）

源頼朝の妻政子が三嶋大社に奉納したもの。

現存する手箱の中で、内容品の整った最も古いもの。歯黒箱・白粉箱や紅筆・眉作・笄・髪飾りなどが納められ風俗的にも珍しい。

合口造り、甲盛りと胴張りがあり、側面に紐金物が打ってある。「白氏文集」による意匠で、水辺に梅が咲き、雁が群れ、水鳥が遊ぶ図である。研出蒔絵・高蒔絵・付描等を用い、蒔絵の基本的技法の完成期を示す作として重要である。

編集後記

人間とは勝手な生き物である。他人より自分が勝れていると思い込みながらそれでも自信が持てず常に比較しては安心する。自分の価値観や理解の程度を越える者がいるとそれらの人々に対して世の中の偏見を押しつけようとするし、さらには無関係な第３者をもまき込んで自分のレベルの仲間作りをする。便宜的で安易な方法であり、誰でもが陥りやすい誤りではある。

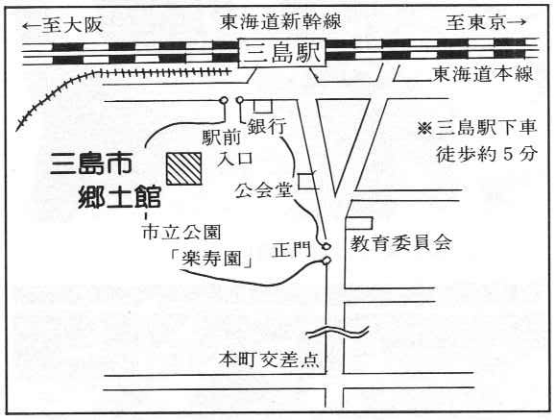
昭和も60年を数える事になった。ささやかな「たより」ではあるが歴史を通して皆が郷土を理解し合える場としていきたいと念願している。（稲木）

刊行物紹介

○三島の昔話	500円
○戦国の争乱	700円
○三四呂人形図録	1200円
○三島の文化財展	500円
○ふるさと探訪	500円
○明治の三島	200円
○樋口本陣目録	500円
○勝俣文庫目録	200円

利 用 案 内

休 館 日　毎月第１月曜・12月27日～１月２日
開館時間　午前９時～午後４時30分
入場無料　（但し、楽寿園入園の際、有料）



郷土館だより No.20
昭和60年１月１日発行
（年３回発行）
編　　集　三島市　郷　土　館
住所 〒411　三島市一番町19－３
TEL 0559－71－8228
発　　行　三島市教育委員会